

アルフォンス・ミュシャ《サラ・ベルナール》1896年



ルネ・ラリック《ブローチ 翼のある風の精》1898年頃

東京国立近代美術館工芸館巡回展

20世紀の工芸 日本×西洋

— 新しい表現を求めて —

2019年 9月27日金 → 2019年 11月24日日

【会場】 身延町なかとみ現代工芸美術館 【主催】 東京国立近代美術館、身延町、身延町なかとみ現代工芸美術館

【後援】 山梨県、山梨日日新聞社 山梨放送、テレビ山梨、エフエム富士、エフエム甲府、朝日新聞社甲府総局、読売新聞甲府支局、産経新聞甲府支局、毎日新聞甲府支局



磯矢阿伎良《バイオリン・ケース》1931年



板谷波山
《彩磁延寿文水指》
1942年

身延町なかとみ現代工芸美術館

〒409-3301 山梨県南巨摩郡身延町西嶋345 TEL 0556-20-4555 FAX 0556-20-4557

- 観覧料／一般 500円(450円)、大・高校生 300円(270円)、小・中学生 100円(90円) ()は20名以上の団体料金
- 開館時間／午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 休館日／毎週火曜(10月22日は開館)、10月23日(水)

東京国立近代美術館工芸館巡回展

20世紀の工芸 日本×西洋

— 新しい表現を求めて —

2019年 9月27日金 → 2019年 11月24日日

明治時代、万国博覧会への出品を通して、日本独自の美意識と高い技術によって製作された工芸品が欧米から人気を集めると、政府は工芸品を重要な輸出品として位置付けます。殖産興業政策のもと、西洋の愛好家が好むような日本的で豪華な装飾の工芸品が生産・輸出され、日本の技術力と文化が海外へ示されていきました。

大正時代に入ると、工芸製作の中に新しい動きが生まれます。創作表現として工芸品を制作する個人作家が登場し始めるのです。個人作家たちはそれまでの過剰ともいえるような装飾を離れ、作家独自の表現を確立しようと試みました。そのアイデアの源泉の一つとなったのが、アール・ヌーヴォーやアール・デコなど、西洋の様々な

芸術風潮です。

本展では、東京国立近代美術館が所蔵する工芸作品から、大正・昭和の日本の工芸作品と、関連する西洋のデザイン作品を展示します。新しい表現を求めた工芸作家達が西洋の動向をどのように捉え、独自の表現として昇華していったのか、その過程をご紹介します。

※本展は、東京国立近代美術館工芸館の所蔵品を効果的に活用し、広く市民の鑑賞機会の充実と美術の普及を図ることにより地域文化の振興に貢献する事業「東京国立近代美術館工芸館巡回展」を活用して開催するものです。



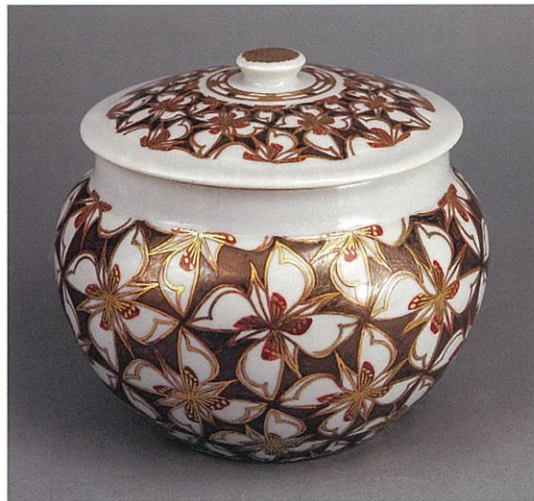
黒田辰秋《白檀塗四稜茶器》1975年頃



クリストファー・ドレッサー《ティー・セット》1878年



山崎覚太郎《喫煙具》1935年頃



富本憲吉《色絵金銀彩四弁花文飾壺》1960年

ギャラリートーク

Gallery Talk

【講師】西岡梢氏(東京国立近代美術館工芸課研究補佐員)

【日時】10月26日(土) 午後2時から 【費用】無 料(入館料は必要です)

【申込】不 要(チケットをお持ちの上、美術館ホールにお越しください)

身延町なかとみ現代工芸美術館

〒409-3301 山梨県南巨摩郡身延町西嶋345(身延町なかとみ和紙の里 内)
TEL 0556-20-4555 FAX 0556-20-4557 身延町HP <https://www.town.minobu.lg.jp/>
和紙の里HP <https://www.town.minobu.lg.jp/washi/> 美術館Twitter @MN_artM

- 電 車 JR身延線※1「甲斐岩間駅」下車
・タクシーで約4分(料金片道約1,000円)
・徒歩25分(約2km)
- 自動車※2
□中部横断自動車道 六郷ICから約5分
・県道9号線を静岡方面に向かい「峡南橋東詰」交差点を右折
□新東名高速道路 新清水JCTから約40分
・国道52号線を甲府方面に向かい「峡南橋西詰」交差点を左折
中央高速バス 身延新宿線
・新宿駅高速バスターミナルより約3時間 バス停「西嶋」下車 徒歩0分
- 高速バス

※1 身延線はJR東海道本線「富士駅」又はJR中央本線「甲府駅」より乗り換え可能
※2 和紙の里無料駐車場あり(普通車55台、バス6台)

